

# ビンナガ 南大西洋

Albacore, *Thunnus alalunga*



## 管理・関係機関

大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT)

## 最近の動き

2016 年 4 ～ 5 月に資源評価が実施された。

## 生物学的特性

- 体長・体重：130 cm、40 kg
- 寿命：10 歳以上
- 成熟開始年齢：5 歳頃
- 産卵場：南緯 10 ～ 25 度の南米大陸寄り
- 索餌場：温帯域
- 食性：魚類、甲殻類、頭足類
- 捕食者：まぐろ・かじき類、さめ類、海産哺乳類

## 利用・用途

刺身や缶詰原料とされる。

## 漁業の特徴

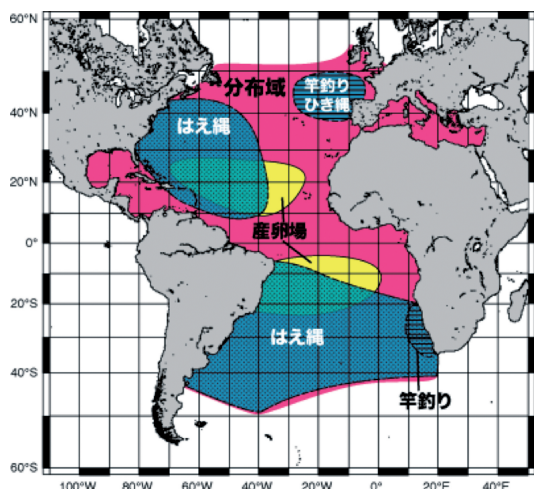
本資源を対象とする漁業は、1950 年代後半の日本のはえ縄の大西洋への進出とともに始まった。1960 年代には韓国や台湾のはえ縄が参入した。現在は主に台湾のはえ縄及び南アフリカの竿釣りによって漁獲されており、日本、ブラジル、ナミビアのはえ縄がこれに次ぐ。特に台湾のはえ縄の漁獲の割合は高く、1973 年以降総漁獲量の 6 ～ 9 割を占めてきた。台湾船は伝統的に本資源を主対象として亜熱帯から温帯域の広い海域で周年操業してきたが、近年は本資源への漁獲努力の減少により、漁獲量が減少している。

## 漁獲の動向

総漁獲量は 1960 ～ 1970 年代にはおよそ 2.0 万 ～ 3.5 万トンの範囲で推移していたが、1980 年代後半～ 2000 年代初め頃には 2.6 万 ～ 4.0 万トンとより高い水準となった。その後、大幅に減少し、2005 年に過去 20 年で最低となる 1.9 万トンとなった。2005 年以降は、約 1.9 万 ～ 2.5 万トンの範囲で推移していたが、2014 年には過去最低の 1.3 万トンを記録した。2015 年は約 1.5 万トンであり、2014 年を上回ったものの、過去 5 年間の平均を下回った。最近年の漁獲量の減少は、主要漁業国である台湾のはえ縄船の操業対象種の変更に伴う本資源への漁獲努力量の減少に起因すると考えられている。日本の漁獲量は 2011 年以降、上昇傾向を示し、2015 年は 1,761 トンであった。なお、2014 年より日本には国別漁獲割り当て：1,355 トンが与えられている。

## 資源状態

2016 年に ICCAT で行われた最新の資源評価では BSP 及び ASPIC によって解析が行われ、資源量は  $MSY$  からの相対値で示された。 $MSY$  は 25,901 トン (80% 信頼区間：15,270 ～ 31,768 トン)、 $B_{2015}/B_{MSY}$  は 1.10 (80% 信頼区間：0.51 ～ 1.80)、 $F_{2014}/F_{MSY}$  は 0.54 (80% 信頼区間：0.31 ～ 0.87) であった。これらの信頼限界の幅は広く、不確実性が大きいと考えられた。過剰漁獲でありかつ乱獲状態である確率は 3%、過剰漁獲もしくは乱獲状態である確率は 31%、過剰漁獲ではなくかつ乱獲状態でもない確率は 66% であることが示された。近年の総漁獲量は操業対象種の変化によって減少傾向を示しているが、2004 年以降、漁獲量は 2 万 ～ 2.5 万トンで推移している。これらのことから、資源水準・動向を中位・増加と判断した。将来予測では、2016 年の総漁獲可能量 (TAC) レベル (2.4 万トン) で漁獲した場合、資源が 2020 年に  $B > B_{MSY}$ 、 $F < F_{MSY}$  (即ち、Kobe plot の緑の領域になる) となる確率は 63% と推定された。



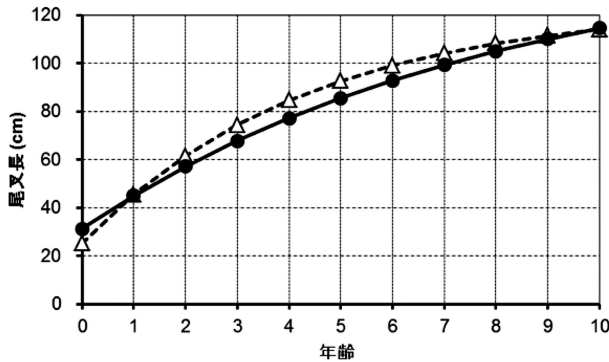
大西洋のビンナガの分布と主な漁場

管理方策

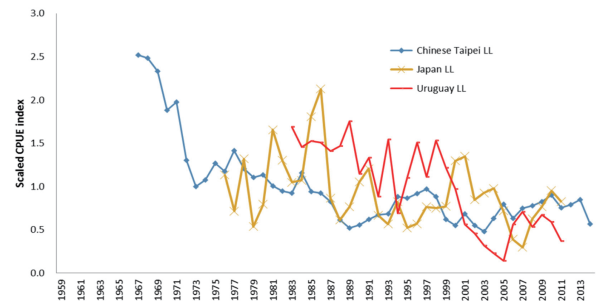
2016 年の ICCAT の年次会合では、2017 ～ 2020 年の TAC を 2.4 万トンとする決定をした。日本へ配分された年間漁獲量は 1,355 トンであるが、ブラジル等から毎年 200 トンの移譲を受けるため、実質的には 1,555 トンとなる。また、漁獲国には ICCAT 事務局への迅速な漁獲実績の通報が義務づけられた。

資源状態のまとめ

- 2016 年に資源評価実施（BSP と ASPIC を使用）。
- $B_{2015}/B_{MSY}$  は 1.10（80% 信頼区間：0.51 ～ 1.80）、 $F_{2014}/F_{MSY}$  は 0.54（80% 信頼区間：0.31 ～ 0.87）。
- 過剰漁獲・乱獲状態ではない確率が 66% と高く、資源水準は中位、資源動向は増加と判断。
- 2013 年の TAC を継続して漁獲した場合、2020 年に資源が  $B > B_{MSY}$ 、 $F < F_{MSY}$  となる確率は 63%



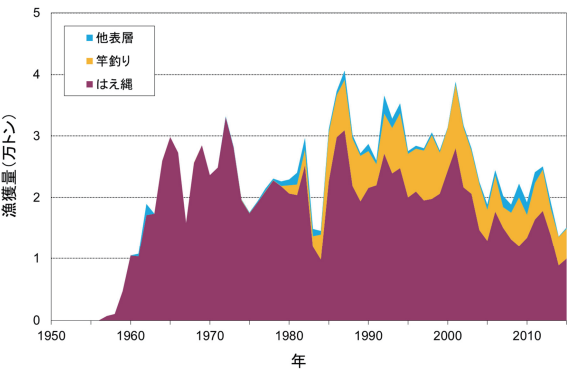
南大西洋におけるビンナガの年齢と尾叉長（cm）の関係  
実線は Lee and Yeh（2007）、点線は Bard and Compean-Jimenez（1980）



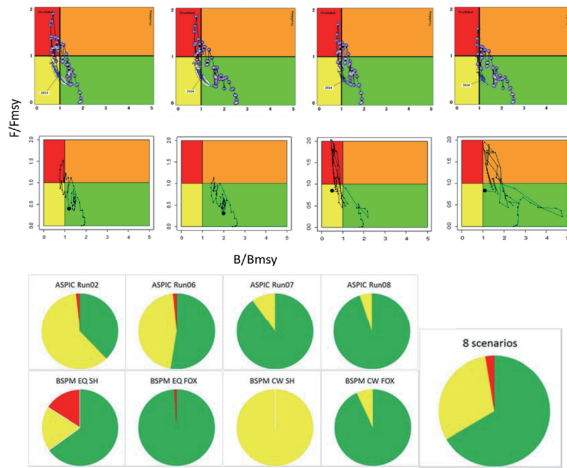
2016 年の資源評価に用いられた南大西洋ビンナガの標準化 CPUE  
Chinese Taipei LL：台湾のはえ縄、Japan LL：日本のはえ縄、Uruguay LL：ウルグアイのはえ縄

管理方策のまとめ

- 2017 ～ 2020 年の TAC は 2.4 万トン。
- 日本への漁獲割り当ては 1,355 トン（加えて、ブラジル等から毎年 200 トンの移譲を受ける）。



南大西洋におけるビンナガの漁法別漁獲量



ASPIC モデル及び BSP モデルのそれぞれシナリオごとの Kobe plot（上段）と資源状態を確率としてを示した円グラフ（下段）

ビンナガ（南大西洋）の資源の現況（要約表）

資源水準	中 位
資源動向	増 加
世界の漁獲量 （最近 5 年間）	13,681 ～ 25,061 トン 最近（2015）年：15,144 トン 平均：19,439 トン （2011 ～ 2015 年）
我が国の漁獲量 （最近 5 年間）	1,129 ～ 3,106 トン 最近（2015）年：1,761 トン 平均：2,019 トン （2011 ～ 2015 年）
最新の資源評価年	2016 年
次回の資源評価年	2020 年（予定）